

## 平和は日常の中に

長岡市立南中学校 2年 青柳 杏

「戦争なんて、昔の話でしょ？」

そう思っていた私でしたが、あるニュースを見て、その考えが変わりました。テレビでウクライナの子どもたちが、地下鉄で暮らしている映像を見たとき、私はショックを受けました。同じ年頃の女の子が、避難先で勉強している。学校も家も、全てが壊されている。戦争が、今も現実にあること。そして、それが私たちと全く無関係ではないこと。その事実を、はっきりと知りました。

私は、まだ広島や長崎を訪れたことはありません。しかし、学校の授業やニュースを通じて、かつて日本で起きた戦争の悲惨さを何度も学んできました。特に心に残っているのは、ある記事で目にした被爆者の言葉です。「目の前で仲間が絶命した」と語るその方は、動けなくなった同僚を励まししながら、せめて生きた証を残そうと「名前を記録して回った」といいます。誰かの人生が一瞬で終わってしまう理不尽さ。それを実際に目の当たりにした人の言葉は、資料の文字以上に重く、私の心に深く刺さりました。

戦争の恐ろしさは、爆発や炎だけではありません。家族と離れ離れになること。友達がなくなること。何より、「いつ自分が死ぬか分からない」という恐怖に襲われることです。ニュースで見たウクライナの子どもたちは、学校の机の下に隠れて勉強していました。ガザ地区では、病院にいた赤ちゃんが命を落としたという報道もありました。どれも遠い国の出来事ではなく、「私たちと同じ年齢の子どもたちの現実」です。戦争は、今もどこかで続いている。その事実から、目を背けてはいけないと思います。

私はこれまで、毎日の生活を「当たり前」だと思っていました。朝、制服に着替えて学校へ行く。休み時間には友達と他愛もない話で笑い合い、夕方には「ただいま」と言える家があり、温かいごはんを食べて眠りにつく。でも、これらはすべて、平和な時代に生きているからこそできることです。

だからこそ、私はこれからも学び続けたいと思います。たとえ現地を訪れる機会が今すぐにはなくても、残された証言や記録に触れ、かつて何が起きたのか、そして今何が起きているのかを自分の頭で考えたいと思います。資料の中の知識として片付けるのではなく、一人の人間が発した「生の声」を想像力を持って受け止めることで、戦争の現実を自分事として捉えていきたいのです。

平和は、決して勝手に続くものではありません。無関心でいることで、平和の尊さは少しずつ忘れ去られ、遠ざかっていくのではないのでしょうか。私にできることはまだ小さいかもしれませんが、まずは知ったことを家族や友達と共有することから始めたいと思います。「戦争の記憶」を風化させず、語り継いでいくこと。それが、今の時代を生きる私たちにできる最初の一步だと

信じています。

平和とは、何気ない日常が当たり前が続くこと。そして、それを守るために、私たち一人ひとりが考え続けることです。平和は、遠い国の話でも、昔の話でもありません。今、ここにある、一番大切なもの。その重さを、これからも忘れずに生きていきたいと思います。